

宋江評価に見る金聖歎評の一特徴 金聖歎評に関する先学の論点整理を手掛かりとして

著者	井上 浩一
雑誌名	集刊東洋学
巻	81
ページ	64-77
発行年	1999-05-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132538

宋江評価に見る金聖歎評の一特徴

——金聖歎評に関する先学の論点整理を手掛かりとして——

井上 浩一

はじめに

代表的な中国白話小説の一つである『水滸伝』には、様々な版本が存在する。その中で通行本となったのは、七〇回までの正文（本文）を持つ七〇回形式の版本であり、その七〇回本という形式をとった最初の版本が金聖歎の手による貫華堂『第五才子書施耐菴水滸伝』（以下金聖歎本^①）である。

金聖歎本には、他の版本に見えない特徴が幾つか見られるが、その顕著なものは二つある。その一つは七〇回という回数であり、もう一つが本稿で取り上げるところの金聖歎によって施された評語、すなわち金聖歎評である。

金聖歎評は、従来の評に見られがちな正文に従属するコメントの域を脱し、自己の主張に沿う評語の付与や正文の改変を積極的に試みている。このような金聖歎の作為に

よって『水滸伝』は作品自体の主題まで大きく変更させられることとなったのであるが、この金聖歎の手による評語について検討するに、他の評者と大きく相違し、彼の主張がもつとも顕著に現れているものの一つに「梁山泊の盜魁（首領）・宋江に対する評価」があることが窺える。

李贄等、金聖歎以前の評価^②では、多くの場合宋江は「忠義」の人物と見なされ、一部例外を除いて賞賛の対象となることが一般的であったが、金聖歎評では一転して宋江を徹底的に批判し、評語に対して主體的関係にあるべき本文にまで、その主張を貫くために至る所で改作を行っているのである。^③この意図をどう考えるかはさておき、金聖歎が敢えてこのような行為に及んでいるということは、宋江に対する批判には、金聖歎の主張の中でもまさに譲ることの出来ない主張が込められていることを意味しているように思えるのである。

そのため——まだ解明すべき課題を含んでいるもの——これまでも多くの研究者が金聖歎による宋江批判を取り上げ、幾つかの基礎的な研究の成果をもたらしている。しかし、これら先学の研究成果は体系的・網羅的整理が行われぬまま放置されているため、それを踏まえた問題への取り組みが困難になっているのが現状である。

本稿は、かかる現状を考慮し、まず先学の論考に関する詳細な比較検討を試みたい。そしてその作業の中から導き出された問題点を踏まえた上で、金聖歎と李贄の着眼点の相違に注目して、金聖歎評の特徴の一端を明らかにすることとしたい。

一 金聖歎の宋江評価に関する先行研究の整理

本節では、考察の前提となる「金聖歎の宋江評価」に関する先行研究の整理をまず試みることとしたい。ただ金聖歎における宋江評価の問題、あるいは宋江批判に関わる論争は極めて多く、それらを逐一揭示しその是非を問うのは冗長に過ぎ、それだけの紙幅も持たない。そのため本節では考察対象たる宋江の問題について、多くの論考の中から内容ごとに類別を行い、次節で代表的な論考を取り上げ、卑見を交えて精査することによって、まず宋江評価におけ

る争点の分布概況を把握したい。

A 盜魁としての宋江への批判 宋江批判の筆頭としては、宋江が「賊」の首領（盜魁）、すなわち国家に対する反逆者であることを根拠としたという指摘がある。例えば以下の論文では、梁山泊の一〇八人による反逆行為を許すべからざるものとしたことが、金聖歎の宋江に対する批判の理由であるとされている。

1 中鉢雅量「金聖嘆の水滸伝観」（『野草』四号、一九七一）。のち『中国小説史研究——水滸伝を中心として——』汲古書院、一九九六所収。（以下中鉢論文）

2 林文山「金聖嘆与『水滸』」（『中華文史論集』一九八〇年第一集、のち沈伯俊編『水滸研究論文集』中華書局、一九九四）（以下林論文）

3 傅隆基「評『両種『水滸』、兩個宋江』説」（『華中工学院学報』哲社版一九八二—、のち沈伯俊編『水滸研究論文集』中華書局、一九九四）（以下傅論文）

4 劉士興「『天下太平起、天下太平結』的模式——評金聖歎批改『水滸』的思想傾向」（『水滸争鳴』一輯、一九八二）（以下劉論文）

この四者の指摘は、何れも宋江が国家に反逆を企てる賊の「盜魁（首領）」であることに、金聖歎による宋江批判の根拠があると指摘する点で一致している。これについては

後ほど詳しく検討する。

B 宋江の個人的資質に対する批判 「盜魁としての宋江への批判」が、言わば梁山泊全体に関わる問題であるのに対して、以下の論考では宋江の個人的な資質に着目し、批判の根拠を求めていることが窺える。また、その根拠となった資質として「宋江の武芸の能力」と「欺瞞的な性格」の二種が論及されていることが確認出来る。

B-a 武芸の能力の低さ 例えば前掲中鉢論文では「宋江の武芸が低微であるのは周知の事柄だが、金聖歎は先ずそのことをあげつらう(二三二頁)」と指摘する。ここに見える指摘は確かに首肯に足る要素の一つであると思われる。しかし、武芸を得手としない者は梁山泊にも多く存在する中で、宋江にのみこの尺度を用いたとすれば、宋江を批判する材料を求めて故意に指摘した可能性も否定できない。そのため他により重要な批判理由が存在すると論者は考えている。

B-b 欺瞞的性格 以下の三者は、金聖歎が宋江の言動に欺瞞性を見出し、批判したとするものである。

1 前掲中鉢論文(前掲書二三三頁参照)

2 馬成生「略論『自誠明、謂之性』——説金評本『水滸伝』第四十二回の評語」(『水滸争鳴』四輯、一九八

五)(以下馬論文)

3 青木隆「金聖歎における批評の意義」(『東方学』九三輯、一九九七)(以下青木論文)

このうち中鉢論文は、この論点による金聖歎の宋江批判を指摘しながらも、これを金聖歎の強弁としてとらえている。他方馬論文・青木論文は、中鉢論文と同様、宋江の欺瞞性を批判の根拠として挙げるが、強弁とは考えず、金聖歎が自己の思想的立場から批判を加えたものと認識しており、三者の間でやや意見が分かれていることが見受けられる。この論点についても、後ほど詳細に検討を加える。

C その他 これまでに述べた以外にも、左記の如き幾つかの観点が指摘されている。

C-a 一貫した性格設定の要求 この論点は、登場人物は一貫した性格を有するべきであるとする金聖歎の主張を踏まえ、金聖歎が宋江の分裂した性格を、一貫して「権詐」な性格になるよう本文を修正したとするものである。例えば陳洪「金聖嘆伝論」(天津人民出版社、一九九六)(以下陳論文)に採られている。しかし、この説明も決して誤りではないものの、金聖歎が宋江の性格を「忠義」に統一するのではなく、「権詐」という人格に仕上げた理由の指摘が必要となろう。

C-b 金聖歎の心理的原因 以下の両者は、金聖歎がその自負心から故意に李贄らと対立する観点を提出したの

ではないかとするものである。

1 幸田露伴「水滸伝の批評家」『帝国文学』二四巻 七月号、一九一八（以下幸田論文）

2 前掲陳論文（前掲書七四頁参照）

しかし幸田論文では明確な根拠が示されているとは言えず、一方陳論文でも金聖歎の自己顕示欲の強さや、李贄への対抗意識を示す資料は提出されているものの、それが宋江批判に結びつく必然性を示すのか若干の疑問が残る。

Cic 言論統制からの回避 この論点は、前掲陳論文の「他要通過対宋江的斥罵来消解『誨盜』的罪名（七四頁）」に由来する。同様の論法は金聖歎の宋江批判が彼の本心ではないとする主張にしばしば見られるが、宋江を批判することによって「誨盜」のそしりを解消できるとする根拠がやや不明瞭である感を否めない^①。

以上の論点を集約すると、金聖歎が宋江批判を行った根拠として、（A）盜魁であつたことに根拠を求めるもの（中鉢論文・林論文・傳論文・劉論文）と、（B）宋江の個人的資質に根拠を求めるもの（馬論文・青木論文）とに、大きく二分されることが窺え、それを内容的に敷衍すると（A）は梁山泊全体に関わる事柄であるのに対し、（B）は宋江一個人の評価の問題となっている。その詳細について次節で更に検討を試みることにしたい。

二 宋江批判理由の検討

1 盜魁（賊の首領）としての宋江への批判

上述のとおり、先行研究では、金聖歎がそれまでの版本において賞賛の対象であつた宋江を一転して辛辣な批判にさらした理由の一つとして、「盜魁としての宋江への批判」という観点が提示されたが、ここで少しく四氏の観点に基づいて、その論説を検証してみることとしたい。

中鉢氏は「親体制派、秩序維持主義者（二三七頁）」である金聖歎が「水滸起義そのものを悪と見なす見解（同上）」を持ったことが宋江批判の根底であると考え、宋江以外の「賊」についても「梁山泊に拠つての反逆行為は容認していない（二四〇頁）」ことをその証左としている。加えて傳論文・林論文では「水滸起義」に関する見解にやや食い違いが見られるものの、「賊」であることが金聖歎の宋江に対する批判理由であると述べる点では一致している。その意味で四氏は宋江＝賊＝批判すべき存在という認識で共通している。

また、四氏が指摘した資料以外にも、宋江への批判がその「賊」に向けられていることを知ることでできる金聖歎の評語は多い。例えば第五七回の回初総評では、

夫宋江、淮南之強盜也、人欲圖報朝廷、而無進身之策、至不得已而姑出於強盜、此一大不可也。

と、「強盜になった（出於強盜）」ことが宋江に対する批判理由の一つであることを指摘している。また、一〇八人が強盜となり梁山泊に集結することについては、金聖歎本巻一「序二」で次のように指摘している。

若夫耐菴所云水滸也者、王土之浜則有水、又在水外則曰滸、遠之也。遠之也者、天下之凶物、天下之所共擊也。天下之惡物、天下之所共棄也。

これは「水滸」という書名の由来について言及した箇所であるが、ここでも金聖歎は「水滸」とは辺境の地を示すもので、この書名が強盜になった者を辺境に遠ざけんとする作者の意志を表すと述べ、一〇八人を「凶物」「惡物」と表現しているのである。

一〇八人や宋江が「賊」の行為に至ったことに對して金聖歎が非難する箇所は枚挙に暇がないため、紙幅の関係でこれ以上の資料提示は割愛するが、梁山泊に集結した一〇八人を「賊」と見なし、この「賊」という「凶物」「惡物」は「天下が共に攻撃するもの」「天下が共に棄てるもの」だと考えたことがその「賊」の首領である宋江を金聖歎が批判した理由（の少なくとも一つ）であったことは間違いないところであろう。

2 宋江個人に対する批判

中鉢・林・傳・劉論文による前項の如き指摘について、異なる根拠を提示する馬・青木両氏の論考は、四氏に対する意見の異なりについて言及を行っておらず、双方の見解の相違をどのように突き合わせるべきなのか的確な指摘が今一つ見えない。そのためここで少しく卑見を提示して両見解の相関を検証したい。

四氏の通り、金聖歎は、梁山泊の一〇八人を許すべからざる「賊」であるとし、宋江に対しても「賊」の首領であることから批判を加えていることは間違いない所であろう。しかし、例えば金聖歎本巻三「読第五才子書法」（以下「読法」）に見える人物評定で、「一百八人中、定考武松上上。時遷、宋江是一流人、定考下下。」と、武松を「上上」、宋江を「下下」と宋江を極端に低く評定する点、また梁山泊の個々の「賊」についてはそれぞれの資質（能力や資性）を称賛し、強盜にならざるを得ない境遇に同情を見せる箇所が確認されるという二点から、単に賊という立場に對して金聖歎が宋江に批判を行ったと判断するには疑念を差し挟まざるを得ない。これに對して「首領であることから集的に批判の的となった」という説もあり得るが、金聖歎のコメントを精査するに、その説が成り立つ余地も殆ど無い

と言わざるを得ないのである。

この賊と首領との違いについては金聖歎自身、第一七回回初総評で「宋江、盜魁也、盜魁則其罪浮於群盜一等」と、「一等」の差が存在すると記している。その差をどう判断すべきか決めかねるものの、宋江以前に「盜魁」を務めていた晁蓋に対しては、宋江と同程度に敵視を示していたとは思えない節が明白に見受けられるのである。

例えば、金聖歎は第一五回の回初総評で晁蓋らが犯した「賊」の行為である「智奪生辰綱」について、

故我謂生辰綱之失、非晁蓋八人之罪、亦非十一禁軍之罪、亦並非一都管兩虞候之罪、而實皆梁中書之罪也。

と述べている。ここで金聖歎は「智奪生辰綱」という事件の罪は梁中書にあるとしており、晁蓋は「盜魁」でありながら罪に問われておらず、その行為が批判の対象にはなっていない。「賊」であり盜魁であることが、宋江に対する批判の理由の全てだとすれば、この晁蓋と宋江の間の評価の差は不当に大きすぎると言わざるを得ないのである。

論者は「盜魁たる宋江」への批判を完全に否定するものではない。しかし、それが仮に宋江を批判した理由の一つであったとしても、それ以外に宋江個人に対する何らかの批判的な見解も併存し、しかも盜魁であることからの批判よりも重要な位置付けをされていたのではないかと考えて

いる。

例えば、金聖歎本卷三「誑法」に見える「賊」の一人一人に対する人物評定の中に、宋江を李逵と比較する箇所があるが、ここでは、

蓋作者只是痛恨宋江奸詐、故處處緊接出一段李逵朴誠來、做箇形擊。其意思自在顯宋江之惡、却不料反成李逵之妙也。

とある。つまり金聖歎によると、作者は宋江の「奸詐」な性格を描いた直後には李逵の「朴誠」な性格を描き、宋江の悪（「奸詐」）を強調しようとしていると主張しており、ここで彼は宋江個人に対する批判の根拠として、宋江が「奸詐」つまり「朴誠」ではない点を指摘しているのである。

また、それ以上に金聖歎が批判の対象としたのが、宋江が自から「朴誠」を装う点であるように思われる。例えば「誑法」における宋江と呉用との比較では、

呉用定然是上上人物。他奸猾便与宋江一般、只是比宋江、却心地端正。（中略）呉用与宋江差処、只是呉用却肯明白說自家是智多星、宋江定要說自家志誠質朴。

と示されている。ここで金聖歎は呉用も宋江と同様、狡猾な人物であると評している。しかしそれでも呉用が「上上」と評価されるのは、彼が「智多星」と自称し、計略を用いる人物であることを自ら認める為である。これに対し宋江

は「志誠質朴」を装おうとする。金聖歎は宋江のこのような欺瞞性を不誠実として批判しているのではなからうか。

この点については、馬・青木論文に関連する指摘があり、例えば青木論文では、宋江が金で友情を買いながら自らを「孝義黒三」と称することを批判した第三六回の回初総評を資料として、「既成の道德觀念から自己の行動や心情を正当化することによって、自己の利害を隠蔽する欺瞞に金聖歎は耐えることができない。」(五頁)と述べており、卑見にも有益な見解を提供している。

このように金聖歎の宋江批判の中心は、まず宋江が「朴誠」ではない点、そして故意に「朴誠」を装う点に置かれていたものと思われ、従ってその重要な要素の一つである「奸詐」「権詐」という批判は、宋江が自ら「忠」を言い、「孝」を言い、「志誠質朴」を言う欺瞞性に対する金聖歎の否定的な姿勢に由来していると考えられるのである。

以上が金聖歎による宋江批判に関する先学の研究と、それに対する卑見であるが、何故金聖歎はこのような視点に重きを置いたのであるうか。この点について、金聖歎本以前の版本において同じく宋江に対して批評を試みた人物——李贄や『忠義水滸全伝』の評者——の観点との比較を通して、これまでの過程で洗い出されてきた金聖歎評の位置づけを再確認し、卑見をより明確なものにしたい。

三 金聖歎以前の宋江評価との比較

これまで専ら金聖歎が批判を行う根拠について言わば内容の面から論じてきたが、残された紙面を用いて、その批判の視点がいかなる立脚地からもたらされたのかを、『忠義水滸全伝』において金聖歎と同じく宋江に批評を加えた「李卓吾先生評」の評者(以下「全伝」評者)との比較を通して確認したい。

金聖歎が宋江に対して痛烈な批判を加えたのに対し、一方の「全伝」評者は寧ろ宋江に高い評価を与えていることは周知の通りである。その評価の相違を生み出した要因として、両者の思想背景や各自の結論に至るまでの根拠の相違などが考えられる。

このうち思想背景については、金聖歎はともかくも、評語以外の資料を持たない「全伝」評者の思想背景を導き出すことは極めて困難であるが、「全伝」評者の見解には少なくとも幾つかの点で李贄との共通性があり、その李贄も金聖歎と思想背景が近似することは既に前掲青木論文・馬論文等に指摘されている通りである。よってここに評価の相違を生み出した要因を見出すことは、俄には難しいと考えられる。そのためここでは、特に客観的に見て大きな相違が認められる着眼点に注目して検討を試みたい。

「李卓吾先生評」の実際については、別途拙稿「忠義水滸全伝」における「李卓吾先生評」の人物評価について¹⁹⁾で論じたことがある。そこでも指摘したことではあるが、例えば最終回の総評で「公明一腔忠義、宋家以鴆飲極之。昔人云、高鳥盡、良弓藏。狡兔死、走狗烹。千古名言」と宋江らを「良弓」「走狗」の語によつて表現する如く、「全伝」には評者が批評の尺度として能力の有無に着目して述べる箇所が見受けられる。このような有能・無能という評価が如何なる視点に基づいているのかを見るに、この箇所の比喩は宋江らが宋朝の為に遼や方臘（彼らが「高鳥」「狡兔」に該当する）を討つたことを述べたものであることから、宋江らの「有能」とは国家（宋朝）にとっての有用性を示していることが窺えよう。

また例えば『全伝』第七八回にある童貫の軍が二度にわたつて梁山泊に敗れ高俅が挙兵する場面では、その回末評で「蔡京已喪師失律、高俅起而繼之、宋朝可謂無人。所謂十節度亦是有用人材、而統率者非人、債轅覆轍、甚爲可矜」とあるように、蔡京が討伐に失敗すれば次は高俅という無能な人材しかいない状態を嘆き、一〇人の節度使という有用な人材が、総帥が無能なせいで活かされないことを憐れんでいる。ここでも「宋朝可謂無人（宋朝には（有能な）人材がない）」と評者の視点から始まるように、「全

伝」評者の着眼点は概ね国家等の広い視野から勘案し、その上で価値判断が考慮されている嫌いがある。

また金聖歎以前に『水滸伝』に評語を施したとされる李贄も、彼の著作である『藏書』において、人物評価に際して「全伝」評者と同様に能力の多少を論じたことは、山下龍二氏によつて既に論及されている。また『焚書』卷三「忠義水滸伝序」でも、

施・羅二公身在元、心在宋。雖生元日、實憤宋事。是故憤二帝之北狩、則称大破遼以洩其憤。憤南渡之苟安、則称滅方臘以洩其憤。敢問洩憤者誰乎。則前日嘯聚水滸之強人也。欲不謂之忠義不可也。

とあるように、梁山泊の一〇八人を忠義と評する視点としても、「発憤之所作」の立脚点としても、何れも「心在宋」「憤宋事」が述べられており、何れも根本に国家、或いはそれに相応する大局的な視点から考慮が行われている傾向が認められ、少なくとも「忠義水滸伝序」における人物評価はこの傾向に沿って行われたものであると考えられるのである²⁰⁾。

一方、金聖歎はどうかというと、彼の視線は登場人物の些細な言動に対して向けられることが少なくない。例えば第一〇回、林冲が梁山泊の仲間に入る条件として、通行人の首を取ってくるよう首領王倫に要求される場面がある。

その第一日目、通行人が通らなかつた為、林冲は首を手に入れられず、梁山泊に帰り「到房中討些飯喫了（部屋に帰っていくらかの食事をめぐんでもらって食べた）」という箇所があり、ここに金聖歎は「一『討』字哭殺英雄（『討』の一字が英雄を死ぬほど泣かせる）」と評をつけている。つまり林冲ほどの英雄が相応のもてなしを受けないばかりか、食事をめぐんでもらって食べなければならぬことに金聖歎は同情しているのであるが、ここから彼が「討」という、たった一文字で記される言動にまで着目していることが窺えよう。

また金聖歎は、そのような登場人物の言動を仔細に見つめる視点から、更に彼らに対する評価も下していることが窺える。例えば前述の通り彼は宋江を「奸詐」「権詐」と評価するが、それは以下のような箇所から読み取っているのである。

例えば第三五回、護送される宋江を梁山泊の者たちが救いに來るが、宋江は梁山泊に逃れる事を拒み、首枷さえ「國家法度」として外させなかつたが、続く三六回で、ある屋敷に泊めてもらった時には、護送役人の勧めに従つてその首枷を外している。金聖歎はこれについて、梁山泊で首枷を外すことを拒否する場面では「宋江假」という評と共に、

於知己兄弟面前偏說此話、於李家店、穆家莊偏又不然。

写宋江醜態（知己・兄弟の面前ではあくまでこのように言うが、李家の店や穆家莊では全くそうではない。（これは）宋江の醜態を描いているのである）。

と述べ、首枷を外した箇所では「与前山泊対看、所以深明宋江之権詐也（前の梁山泊（の場面）と対にして看ることによつて、宋江の権詐が深くまで明らかになるのである）」「此書写宋江権詐、俱於前後対照處露出（この書に描かれた宋江の権詐は、皆前後を対照することで露わになる）」と、裏表のある行動から宋江の「権詐」が読みとれることを繰り返し指摘している。このように「首枷を外す」という些細な言動に向けられた視点の中から、金聖歎は宋江に欺瞞性を見出していることが窺えるのである。

また、第五九回、曾頭市との戦で晁蓋が死に、宋江が首領の位を臨時に引き受ける場面がある。この時宋江はしきりに辞退して首領の座に就こうとせず、周囲に勧められてようやく首領を引き受ける際にも「今日小可權当此位、待日後報讐雪恨已了、拿住史文恭的、不拘何人、須当此位（今は私が仮にこの位に就きますが、後日仇を討つて恨みを晴らしたら、史文恭を捕らえた者が、誰であろうとこの位に就かなければなりません）」と、自分の首領としての地位が一時的なものであることを強調するが、「仮の首領」になるとすぐに「聚義庁」を「忠義堂」と改め、梁山泊を六つの

寨と三つの関門、四つの小寨などに分け、それぞれの役割分担と各部署内での順位を明確かつ詳細に決定する。これに対して金聖歎は、

豈是臨時猝辦之言。前書謙讓、後書分撥、以深表宋江之權詐。(どうして(これが)その時にわかに取り裁いた言葉であろうか。前に謙讓を書き、後ろに役割分担(する場面)を書くことによって宋江の權詐を深く表しているのである。)

と述べており、「仮」を強調しておきながら、着任と同時に仮の首領とは思えない大規模な梁山泊内の整理を進める宋江の言動に欺瞞を指摘しているのである。そしてこのような着眼と評価の手法は、宋江のみならず魯智深・李逵等の他の登場人物にも並べて行われていることが認められるのである。

このように金聖歎評には、個々人の言動を注意深く観察し、あくまで個々人の言動に視点を据えて各人の資質を見抜き、評価を加える事に力点を置く傾向が有るのである。そして宋江に対してもかかる手法を用いて彼の中の欺瞞性を見出し、「權詐」という評価を与えるに達したと考えられるのである。

紙数の関係から節略に指摘するにとどめたが、李贄や「金瓶」評者は、国家等の広い(或いは大局的な)視点から考

慮をはじめ、それを集約する形で人物の評価を導き出す手法を取るのに対し、金聖歎は個々の人物の言動をつぶさに観察し、その過程から一人間としての資質を読み取り、それを拠り所として人物の評価を導き出すという手法を取る傾向が認められるのである。

前節では金聖歎評の特徴を把握すべく、先学の研究から金聖歎の宋江批判について検討したが、その試みの中から明らかになったこと——つまり宋江批判は、宋江が盜魁であることに準拠するものばかりでなく、寧ろ宋江の個人的な資質により重点を置かれたこと——は、やはりこのような金聖歎の姿勢に由来したものと考えられるのではなからうか。

結びにかえて

以上、本稿の内容を要約すれば、次の通りとなる。

金聖歎の宋江批判の根拠について述べた先行研究を整理・検討すると、(A)盜魁であったことに根拠を求めるもの、(B)宋江の個人的資質に根拠を求めるものが挙げられたが、①宋江以前に「盜魁」を務めていた晁蓋に対しては、宋江と同程度の批判を示していたとは思えないこと。②宋江以外の「賊」に対しては、落草したことに對する同

情や、貪官への反抗に対する賞賛などをする箇所が指摘されていることから、(B)は(A)からの批判よりも重要な位置付けをされていたのではないかと考えられる。

そこで(B)を手掛かりに、宋江個人に対する批判を検討した結果、宋江が「朴誠」ではないこと、そして故意に「朴誠」を装う点に金聖歎が批判の根拠を置いていることが解り、その「奸詐」「権詐」という批判は、宋江が自ら「忠」を言い、「孝」を言い、「志誠質朴」を言う欺瞞性に対して金聖歎が加えたものであることが解った。

また、金聖歎による宋江批判の視点については、『全伝』評者及び李贄が国家などの大局的な視点から考慮を行い、個人の評価へと集約させる傾向が見受けられるのに対して、金聖歎のそれは、あくまで個人の言動に着目し、「奸詐」「権詐」の如き「個人の資質」を視点の基盤に据えた所にその特徴があると思われるのである。

本稿では金聖歎評の特徴の一端を指摘するにとどまったが、金聖歎評自体にも、あるいは李贄・「全伝」評者との関係についても、まだ取り組むべき課題は多い。殊に所謂「腰斬」の問題などは避けては通れぬ重要な課題であろう。また、本稿で述べた着眼点の相違には、両者の『水滸伝』観の異なりが背景にあるものと思われるが、これらの点については、今後の課題としたい。

注

(1) 金聖歎本のテキストとしては『第五才子書施耐庵水滸伝』(中華書局、一九七五)を使用した。

(2) 評語は正文の眉欄に記された眉批、正文の行間に記された夾批、各回の冒頭や最後に付けられる総評、それに割注など、正文の周囲に施されたコメントの総称である。金聖歎はこの評語のほか、正文の前に「序一」「序二」「序三」「宋史目」「宋史綱」「説第五才子書法」「施耐庵自序」などの文章も置いた。そこで一般には、これらの文章も金聖歎評の範疇に含まれるものとして扱われている。

(3) 例えば高島俊男「金聖嘆批判の論理(上)——水滸批判をめぐって——」(『中国研究』七三号、一九七六)では、李贄によって「水滸伝」は「忠義の物語ということになっていた」が、「金聖嘆はこれが気に喰わ」ずに改作し、「『強盜』に筆誅を加え、強盜をして中国に居さしめぬ」という意図の元に書かれたと述べている。

(4) 金聖歎以前に「水滸伝」の価値を見出したと言われる李贄や、金聖歎本の底本とされる「二〇回本『忠義水滸全伝』」に附された所謂「李卓吾先生評」等がある。

(5) 何心「水滸研究」(上海文芸聯合出版社、一九五四)では金聖歎の本文改変理由の一つに「宋江への敵視」(一〇八頁)があるとされ、四一回、四三回、五七回、五八回、六七回(回数金は金聖歎本)の改変がその例として列記されている。もちろん、自己の主張に沿って「水滸伝」正文の改変を試みる行為は金聖歎本に始まることではないが、かくも大幅な改変

を行ったのは金聖歎本の他にない。他の版本における主張に沿った改変については、例えば笠井直美『水滸』における対立の構図（『東洋文化研究所紀要』一二二冊、一九九三）参照。

(6) 中国における『水滸伝』批判については高島俊男『金聖歎批判の論理（下）——水滸批判をめぐって——』（『中国研究』七四号、一九七六）参照。

(7) また、論文ではないが『水滸』（作家出版社、一九五三）の「出版説明」にも同様の指摘がされている。

(8) 頁数は『中国小説史研究』のそれを指す。

(9) 中鉢氏のこの指摘は金聖歎が宋江の行動に関する様々な箇所を書き換えた上で宋江を批判していることを踏まえて述べられている。しかしここで問題になるのは、なぜ金聖歎がそのような強弁（あるいは書き換え）に至ったのかという必然性である。これについては論文中に説明が無いが、中鉢氏は「金聖歎が宋江を嫌うのは、以上のように宋江が『盗魁』であったことに由る所が大きい。宋江の武芸低微や権詐をとりたててあげつらうのも、盗魁である宋江が憎ければその全ての面が疎ましく思われる結果であろう（二二九頁）」と述べていることから、「盗魁」であったことがより根本的な原因であると考えたと思われる。

(10) 早くは燕南尚生『新評水滸伝』（直隸官書局、一九〇八）の「新或問」でも同様の説が述べられている。

(11) 辛島曉『金聖歎』（東京大学中国哲学研究室編『中国の思想家』勁草書房、一九八七）では、『元恭文集』や『池上草

堂筆記』などを資料に、『水滸伝』に評語を施した行為によって「金聖歎が特に槍玉にあげられ（六五〇頁）」たと述べる。この説は「賊」を非難したとする論点（A）の対案には為り得るが、「賊」の中で宋江を特に強く批判した理由は説明できず、この点で論点（B）の対案には為り難い点にも疑問が残る。

(12) また、劉論文でも同様に「可以看出金聖歎对宋江的基本態度、其抨擊的主要内容也是從農民起義這事件着眼的（三三七頁）」と述べる。

(13) 傳論文では、「他對通入水泊的英雄寄予了同情、并贊賞他們懲飭貪官汚吏的反抗鬥爭行動（三三八頁）」としながらも、「一個方面的原因是出自他對農民起義領袖的偏見和曲解、他認為凡是領頭作亂的人都是『奸詐』之人（三四〇頁）」ことが宋江に対する攻撃の理由であるとしているが、その論拠となる資料は掲げられていない。

(14) 林論文では、「宋史綱」を資料に、「一個封建階級的道德倫理觀念頗為濃厚的知識分子（二九〇頁）」である金聖歎から見れば「只要當過強盜、造過反、即使投降了、那個『盜』的名目也不能改（二九一頁）」と述べる。この指摘は「水滸起義」に関する食い違いを避け、かつ、中鉢論文では明白に述べられていない、金聖歎が「水滸起義」を「悪と見な」した理由について述べていることになろう。つまり、一〇八人の反抗に同情の余地や賞賛の価値が存在するか否かにかかわらず、金聖歎はその倫理観から、盗賊は盗賊と見なさねばならないと考えたと思われるのである。

(15) なお、これを「矛盾」ととらえ「賊」への批判を本心ではないとする論文もある(張國光『水滸与金聖嘆研究』(中國書畫社、一九八一・葉朗『中國小說美學』(北京大學出版社、一九八二)等)が、「賊」に成らざるを得ない境遇に同情を寄せることと、「賊」の行為を罰すべきと考えることは同次元の問題ではなく、必ずしも矛盾ではないと思われる為、本稿ではこの説を採らない。

(16) 馬論文では、「大学」や「中庸」を参照しつつ「忠恕」について述べた第四二回の回初総評を根拠に、金聖歎は本性に基づく思想感情の表現を要求し、これに合致しない宋江の行動を「權詐」などと批判したとする。

(17) 本稿では、一二〇回本『忠義水滸全伝』に附されたいわゆる「李卓吾先生評」を金聖歎との比較対象として用いる。テキストは宮内庁書陵部蔵本を使用した。一二〇回本が金聖歎本の底本であったことについては大内田三郎「水滸伝繁本考―繁本各回本の関係について―」(天理大学図書館報『ビブリア』四〇号、一九六八)参照。なお、「李卓吾先生評」の評者が誰かについては定論が無い。本稿では便宜上「全伝」評者とした。評者の問題については、白木直也「二百二十回水滸全傳の研究―其の「李卓吾評」をめぐる―」(『日本中国学会報』二十六集、一九七三)、佐藤鍊太郎「李卓吾評『忠義水滸傳』について」(『東方学』七一輯、一九八五)などを参照。

(18) 前出佐藤鍊太郎「李卓吾評『忠義水滸傳』について」、及び拙稿「忠義水滸全伝」における「李卓吾先生評」の人物

評価について」(『中国古典小説研究』四号、一九九八)参照。

(19) 前掲拙稿一九〇二九頁参照。

(20) 前掲拙稿二四頁参照。

(21) 『藏書』「世紀列伝総目後論」に見える「儒臣雖名為學而実不知學(中略)卒為名臣所嗤笑。然其実不可以治天下國家、亦無怪其嗤笑也。」(テキストは『藏書』中華書局、一九五九を使用)について、山下氏は「李氏藏書について(二)」(『森三樹三郎博士頌壽記念東洋學論集』、朋友書店、一九七九)で「儒臣が名臣に劣るのは天下國家を治める學を學ぶと称しながら天下國家を治めるだけの能力はないからである。すなわち経世の実學を知らないからである。「名臣伝」のはじめに「経世名臣」が挙げられていることからそれは明らかである(九〇〇頁)」と解説する。このように「藏書」の中には人格よりもその能力、とりわけ國家を治める能力を規

準に人物を評価する箇所が見られるのである。

(22) テキストは『焚書・続焚書』(中華書局、一九七五)を使用する。

(23) ここまで述べた両者のうち、「全伝」の評語については、後述の金聖歎評と同様、本文中に描かれた登場人物の言動に密着したものも見られる。ただし全体的な傾向としては「忠義水滸伝序」に見られた李贄の評価と共通するものが多い。また、能力を基準とした評価の中にはこれに該当しないものも見られるが、評者が能力を評価基準とした意図の中に「無能な官吏に対する批判」や「有能な人物登用の主張」等、國家に関わる視点を見出すことができる。この点について

も前掲の拙稿を参照されたい。

(24) 魯智深を評価するに際して、第二回の、金親娘が鄭屠に虐げられていると聞いた魯智深が「回到経略府前下処、到房裏、晚飯也不喫、氣憤憤地睡了」という正文に着目し、「写魯達写出性情来。妙筆」と、魯智深の性情を「晚飯也不喫」「氣憤憤地睡了」という憤りの表現から読みとり、同じく二回の「魯達大怒、攪開五指、去那小二臉上只一掌、打得那店小二口中吐血、再復一掌、打落兩箇當門牙齒」という正文について、「一路魯達文中、皆「只一掌」「只一掌」「只一脚」、写魯達濶綽打人、亦打得濶綽」と、魯智深の強さを「只一掌」「只一掌」という表現から読みとっている。また「説法」ではこれらの箇所から帰納し、「魯達自然是上上人物、写得心地厚实、体格濶大」と魯智深を評価する。また李逵については、第三七回、初めて李逵を見た宋江が「喫了一驚」した、という些細な表現から「宋江喫驚句、蓋深表李逵旁若無人、不曉阿諛、不可以威劫、不可以名服、不可以利動、不可以智取。宋江喫一驚、真喫一驚也」と彼の性格を読み取る。

(25) 前掲葉朗『中国小説美学』、郭瑞『金聖嘆小説理論与戲劇理論』（中国文联出版、一九九三）参照。

(26) 前述のとおり金聖歎は、宋江を「権詐」、李逵を「朴誠」とするように、登場人物の資質の中でも特に性質・性格面からの評価をしていることが窺える。この様な評価自体、李贄や『金瓶』評者の如き大局的な視点からは見出しにくく、評価対象の言動を仔細に見つめる必要を有するものであろう。この事も金聖歎が個々人の言動に視点を据えたことの傍証

になると考えられる。